

氏 名 (本籍)	さか　もと　ひろし 坂　本　弘 (岐阜県)
学 位 の 種 類	文学博士
学 位 記 番 号	乙 第 11 号
学位授与の日付	昭和50年10月14日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項
学位論文題目	神 秘 主 義 研 究 (上・下)
論文審査委員	(主査) 教 授 木 場 深 定 (副査) 教 授 金 松 賢 諒 教 授 藤 原 幸 章

学位論文審査要旨

神秘主義については、従来多くの研究が行なわれて来たに拘わらず、それがいかなる意味の、またいかなる範囲の事象を指すものであるか、更にその本質を何に求めるかなどの問題については、未だ意見の一致を見るに至っていない。この現状を念頭において、本論文は、これらの問題について主として宗教類型学の立場から独自の見解を示したものである。内容は四章から成り、その論旨を要約すれば以下の通りである。

(論文内容の要旨)

第一章「神秘主義の概念」では、神秘主義の意味規定に関する在来の諸説を彼此勘案し、それらの批判的整理の上に立って、改めてその概念を明確にし、同時にその指意する事象の範囲を明らかにしようと試みている。著者によれば、神秘主義の諸用法を簡にかけて行くとき、それは広狭の二義に大別される。広義の用法とは、広く神との生きた密接な関係が意識または体験されるところに神秘主義を認めるものを指し、狭義の用法とは、これをより狭く、特に神秘家と呼ばれる思想家、並びに特質上これに相通ずる宗教者の立場に限定するものである。ここで広狭を区別する一つの目安とされるのは、いわゆる預言者的宗教であるが、類型学的観点からする限り、預言者的宗教を神秘主義と並

立する宗教の基本類型の一つと見るのが適切な見方と考えられる。著者はこの狭義の見方を取った上で、これを性格づけるものとして神秘体験、神秘思想、神秘道の三者を挙げ、前二者は狭義の神秘主義の確認に不可欠な側面であるが、神秘道は必ずしもそうではなく、第一および第二の側面が認められる場合には、これを神秘主義と見なしてよいと論じている。

第二章「エックハルトの神秘主義における中心問題」は、中世のドイツ神秘主義の代表的存在であるマイスター・エックハルトの場合を神秘主義の典型的な範例として取り上げ、主としてその神秘思想と神秘体験との関係の問題を論究したものである。著者は先ず、エックハルトの神秘思想の枠組をなすものを「パリ問題集」、「三部作」等のラテン語著作における神論、就中、神と魂との関係についての見方に求める。それによれば、神における存在とは存在分与の働きにはかならず、この存在分与を通じて神は自己に回帰し、自己を認識する。神における存在はまさにこの自己認識、すなわち自覚にある。しかし神のこの自覚が真に全きものになるのは、魂における神の認識の実現によってであり、従って神は魂を通じて真に自覚的となり、魂もまた神の認識を通じて始めて新しい存在として自覚的となる。次ぎに著者は、エックハルトの神秘主義的实践についての教説を「離脱について」、「教導談話」その他のドイツ語著作に基づいて考察し、特に被造物からの離脱が神を把捉するための慧敏な理性使用の心構えと表裏の関係にあることを明らかにする。続いて神秘体験の問題に入り、エックハルト自身の体験を窺わせる若干の章句を引照して、その重点がいわゆる脱自的な神秘的合一の状態に入ることにあるのではなく、むしろそれをも破って醒め出る自覚性にあることを指摘している。更に著者は、この自覚的還帰を神からの方向において捉えた神における息子の「誕生」の思念の解明に移り、エックハルトにおいてこの思念が始源としての神性の不生性における誕生、いわば不生の生を含意するものであることを指摘する。最後に、同じ自覚的還帰を魂からの方向において捉えた魂による神の「突破」の思念を取り上げ、神性への突入・突破と被造物の世界への回帰とは時間的継起の関係において解すべきでなく、むしろ自覚性そのものの固有の構造に共属することを特に強調している。

第三章「名への原始的信念と名の神秘主義」においては、神秘主義の一つの特殊事例の研究として、名への原始的信念と、それに結びついた神秘主義の形態を取り上げ、この信念の特質と成立の起因について考察し、進んで浄土教における名号の神秘主義と信仰との関連に論及している。著者は名への原始的信念の特質として、名はその主体に融即していること、名はそれ自体一つの独立した存在乃至は力であること、この力はその主体の力から来ること、従って名を知り支配することは直ちにその主体を支配する意味をもつから、名は厳しく秘匿されなければならないことなどを挙げる。次に、かかる名への原始的信念の成立の起因については、呪術との関連においてこれを明らかにしようとするもの（例えばR. R. マレット）、神話的発想にこれを求めるもの（H. ウーゼナー、E. カッシーラー）、ヌーメンの原音声の客体化と神聖視に関係づけるもの（R. オッター）などの諸説があるが、これらはいずれもなお推測の域を出ていないとし、ただ起源の問題は別として、名への原始的信念は言語に固有な精神の力の前理念的な把捉を含むものであると説くカッシーラーの見解は一つの重要な示唆を与えるものと見られなければならないと述べている。ところで、名へのかかる原始的信念は文化的諸宗教において新しい意味を付与されて様々の仕方で摂り入れられているが、著者によれば、そのような摂取が最も顕著な形において見いだされるのは大乘仏教、就中、浄土教における名号の威徳や称名の利益に関する思想である。著者がここに論及するものも主として浄土教における阿弥陀仏の名号に関するものであって、ここでは名の神秘主義は大要、次のように規定されている。すなわち、それは実践面においては、称名念仏を主要な修行方法として三昧発得・見仏または勝境現前を期し、更に順次生の決定往生を願う立場であり、また思想面においては、現実的には弥陀名号の絶大な功德を信じ、それを往生の最も主要な行業として現当二世の勝益を得ることを願い、理念的には能念・所念ともに空または一心の所現と見る大乘仏教の根本的立場を持するという二重構造をもっている。そしてかかる神秘主義の具体例として、中国元代の天如惟則の「浄土或問」および優曇普度の「蓮宗宝鑑」に見られる参禅念仏、わが国では南都三論宗の永観の「往生捨因」における念仏の意義が考察されている。なお、源空、殊に親鸞に至ると、観念・称

念が単なる神秘主義を克服し、一転して徹底した信の自覚に到達しているが、しかしこれを上述の名号の神秘主義の系譜に連ねることは正鵠を逸するものとしている。

第四章「神秘主義の本質について」では、神秘主義の本質に関する若干の特色ある学説を選んでそれらを比較・検討した後、著者自身の見解を結論として提示している。すなわち、例えば E. ゼーバルクは神秘主義は一般に人間存在の二元分裂性を超脱して「一」に達することを求める魂の原衝動であると論じ、K. ベートもやはり「一」への前宗教的な衝動が神秘主義の本質をなすと説く。また P. ティリッヒは宗教の基本類型の一つとしての神秘主義は無制約的意味内実との合一、または神現在の体験に直ちに到達しようとする立場であるとする。更に R. オットーは神秘主義の本質を聖なるものの非合理的な深部要素であるヌーメン的なものの独特な感情に求めている。以上の諸説について気づかれることは、何らかの意味で超越的な対象に関わりなくしては神秘主義は考えられないということ、および人間的現存在の二元性を超えようとする衝動を神秘主義の動因として挙げていることであるが、これは神秘主義の典型を西洋の、特にキリスト教的神秘主義に取っている限り当然のことを言うべきである。これらに対して鮮かな対照をなしているのは、大乘仏教の伝統を踏まえて神秘主義を見ている鈴木大拙の所論である。鈴木大拙は東西の神秘主義を見渡した上で、神秘主義の本質として分別智を超えて発する自覚と、そこに開顕する内面的境位を挙げているが、この場合その典型が仏教者、別して禪家に取られていることは言うを俟たない。なお、同様な自覚に立つ西洋神秘主義者として鈴木大拙が注目しているのはエックハルトであることも注意せられてよい。本論文の著者は如上の諸説の要点・問題点を顧慮した上で、結論として神秘主義の本質を人間意識の二元分裂性または分別智を超えた自覚体験と、そこに現われる境地に見る鈴木大拙の立場を取ることとなっている。因みに、その主要な理由は次ぎの三点に要約される。すなわち、意識の二元分裂性は人間存在の普遍的かつ最も根本的な構造に属するもので、神秘主義に向かわせる最深の動機もここに求めらるべきであると考えられること、この二元分裂性を超えた自覚に達するのでなければ、いわゆる神秘的冥合の体験も単に一過的な至福

の状態の経験に終わらざるをえないこと、および卓越した神秘家や神秘思想には事実しばしばこの自覚体験の消息が看取されることである。このようにして著者は、神秘主義の本質をその現象的諸形態に通有の特質から峻別し、しかもこの本質はその諸形態を最深の次元から規定するものであると論じ、またここから始めて神秘主義および神秘主義的思想の諸形態を具体的に取り扱うことも可能になると論結している。

（審査上の所見）

第一章において著者は神秘主義の概念規定を試み、主として宗教類型学的見地から狭義の神秘主義観を採択し、狭義の神秘主義からいわゆる預言者の宗教を除外しているが、これはすでに Fr. ハイラー 以来のほぼ定着した考えを承けたもので、一応、妥当な見方と思われる。ただこの場合、言うところの類型学概念および構想について立ち入った叙述がないのは遺憾である。次ぎに第二章のエックハルトの神秘主義の研究に関して言えば、その思想が基づく神秘体験を資料の許す限りにおいて跡づけ、またそれが神性の無底の深淵における不生性を携えて現実の被造物の世界に還帰する自覚体験、換言すれば、人間存在の根本構造に根ざす二元分裂性を超えた自覚態に帰着することを解明した点は十分に高く評価されてよい。また第三章における名の神秘主義への論及は、神秘主義の一つの特殊な派生形態を事例的に取り上げたもので、論文全体から見て挿入的であるようにも感じられるが、またそれ自体として本論文の一特色をなす部分とも見られ、特に浄土教における神秘主義的契機を名号の神秘主義として捉え、これを聞信の方向と対置してその意義を考究したのは注目に値する。しかしこれが一つの事例的研究であるとすれば、これになお一二の類例を加え、それらを比較研究することが事例的研究として一層望ましかったと言えよう。最後の第四章の論述は神秘主義の本質についての著者自身の見解を披瀝した重要な部分を含み、宗教的乃至は文化的伝統による制約を認めながらも、神秘主義の一般的本質を深く人間意識の二元分裂性を超えた自覚体験に求め、そこに神秘主義の窮極の存立根拠を見いだしたのは傾聴すべき所論である。ただこの章の最後の詰めにおける結論への逐步にやや密度を欠く感があり、そのために説得性を幾らか弱める結果になった憾みがないではない。しかしこれと

ても事柄の性質上やむをえないことで、もとより本論文の評価を根本において著しく低減するものではない。

以上、要するに本論文の内実は斯学の当該分野に寄与するところの多い重要な洞察を示したもので、文学博士の学位を与えるに値する貴重な業績であると認められる。

(学力の認定)

最終試験の結果、本論文の提出者は大学院文学研究科博士課程修了者と同等以上の学力を有することが確認された。